



森光子・放浪記の舞台背景と臺の油

佐藤 貞弘

昨年九月、森光子さんの「放浪記」を東京・帝国劇場で観劇する機会がありました。皆さんご存じのように「放浪記」は、作家・林芙美子の半生を日記体でつづった自伝小説で、昭和三六年菊田一夫の作・演出でスタートした舞台は三木のり平潤色・演出へと引継がれ継続しています。

森光子さんは四十歳の初舞台の時から林芙美子役を四五年も演じ続けており、一人の俳優が主役を演じる舞台の国内最多上演回数を記録更新中のもので、数日前には、通算上演回数一八〇〇回を達成したという大変な人気の舞台です。また、森光子さんは若いのに老け役に無理がなく、放浪記と共に成長し、舞台としての総合点が現在でも右肩上がりを続けていると言われています。その舞台で楽しみにしていたのは八六歳のデングリ返しの場合なのです。それは四幕、渋谷の木賃宿の場面にあります。昭和二年冬、安宿で暮らす芙美子。ある夜、売春婦の取締まりがあり巻添えに。疑いが晴れた芙美子が新聞に載った自分の作品と名前を見つけて喜ぶシーンが舞台左側で展開中、右側

では手塚緑敏が自然な形で敷布団を直す。そこへお見事！果敢にひっくり返ってくれました。本当に、名作にかける森光子さんの意気込みが伝わってくるという言葉ものです。その時、

やや左手の薄暗い空間の白いものに目が止まりました。白い幟旗が立ってかけてあり「・の油」と読めます。スポットをあびる出演者の動きに目を奪われ、気のつかなかったものが、右手のデングリ返しの場合で明暗の差が強調され白い旗だけが浮き上がってきたようです。オペラグラスで確認すると間違いなく「臺の油」の文字が。この木賃宿に臺の油売りも泊っているのですね。「放浪記」の舞台背景として「臺の油」の幟旗が置かれる時代背景があるとすれば、作品の中に出てくると思ったのですが、大正十二年、二十歳の時、尾道でつけ始めた日記にも、それをもとに昭和三年に発表された「放浪記」から以降、昭和二四年に刊行された「放浪記第三部」までの中にも臺の油はないようです。・何故ここに「臺の油」の幟旗が置かれたのでしょうか？

そのヒントは今年6月のNHKラジオドラマ「風琴と魚の町」の中にありました。

「ええ・・ご当地へまいりましたのは初めてでございますが、当商会はピンケツをもって臺の膏薬かなんぞのようなまやかしものはお売りいたしません。ええ・・おそれおおくも××宮さまお買い上げの光栄を有しますところの、当商会の薬品は、そこにもある、ここにもあるというふうなものとは違いまして・・」蟻のような人ばかりの中に、父の声が非常に汗ばん

で聞こえた。・・・

これは、昭和六年に発表された芙美子の自伝的作品で尾道にて初稿執筆されたものです。

昭和二六年、四七歳で急逝した林芙美子の生涯を考える時、小さい頃から行商の父母や養父に連れられ各地を転々とした木賃宿でのどん底生活。そして、尾道高等女学校を卒業後、東京へ出てからは男に裏切られ、寂しさ、貧しさの中、もがきながら木賃宿での執筆活動があげられます。第二の故郷とも言うべき尾道までの行商生活や木賃宿での生活をダブらせて、貧しく生きてゆく苦しみが生きてくるとして「臺の油」の幟旗を舞台背景に取込んだものと思われ

ます。さて、昔からがま膏薬が存在し、江戸時代中頃にはがまの油売り口上を考え出した初代永井兵助が誕生しました。その後、多くの香具師たちによって全国津々浦々で売られていたようです。一方、その口上を取入れ洗練し完成したのが落語「がまの油」であり、戦後、新しい観光の目玉として落語をもとに創られたのが「筑波山名物がまの油」なのです。

このように、がまの油の起源はたいそう古いものですが、同時にその歴史は新しいものであると言えます。このことから、茨城県の伝承芸能「筑波山名物がまの油売り口上」を演じる私達は、この「筑波山のがま」がもつ古くて新しいものの本質を理解した「がま口上」を心掛けたいと思うわけであり

『頑張ってます！』水戸教室が開講

星野 馨

「サーサーお立会い・・・」陣中膏はガマの油・・・」緑豊かにして田園に囲まれた建物の中から大きな声が聞こえてくる。ここは水戸の隣町、那珂市後台にある田向公民館の一室。今年二月にガマの油売り口上研究会の水戸教室が当地区に開設されました。指導に当たるのは教室の開設にご尽力をされた清水先生と渡辺先生のお二人。

私は昨年九月から十一月に旧新治村の小町の館で開催されたガマの油売り口上の講座を初めて受講させていただき、何とか終了し、会員の一人として入会させていただきました。

しかしながら小町の館は距離的にも遠く、練習会等に参加し少しでも技を研ぎたいと考えておりました私としては、正直なところ続けられるかどうかの一抹の不安を感じていた矢先、自宅に一通の封書が届きました。差出人は同じ那珂市にお住まいの清水泰清様からでした。(研究会の会員であることは存じておりました。)開いてみますと、新たに水戸教室が那珂市後台地区に開設される旨の案内でありましたので、願ってもないことと早速練習の申し込みをさせていただきました。

開講式は二月三日(土)に練習会の会場となる田向公民館で行われましたが、当日は清水様はもとより、ご多忙の中を遠路本部から大世話人の宇野先生をはじめ六名の会員の皆様も応援に駆けつけてくださり、受講生の一人として

も大変心強く感じた次第です。

練習会は原則として毎月第一土曜日の午後一時から約二時間ほどですが、それ以上になることも多く、清水・渡辺両先生の熱心なご指導には心から感謝いたしております。

すでにこれまでに六回の練習会が行われましたが、当初考えていたよりも遥かに奥が深いものがあり、試行錯誤の連続です。

また、七月七日の練習会には本部より大世話人の宇野先生と世話人の市村様がおいでになり、四名の先生方より基本的な発声や動作等、丁寧かつ詳細なるご指導をいただき大変参考になりました。(この席上、開設や指導に努力されている清水・渡辺両先生に宇野先生から手



作りの瓢箪と色紙がそれぞれ贈られました。(

私も二度ほど茨城県フラワーパークで実際の口上を見学させていただきましたが、大変巧みな口上であり勉強させていただきました。また六月三日(日)には清水

先生の地区の敬老会が田向公民館を会場にして開催され、清水先生がガマ口上を披露される

と聞き、私も雑用係で同席させていただきましたがアイデアとユーモアを混ぜての演技は大変好評でありました。

先生方や会員の皆様のごうした巧みにして円熟味のある口上も、長年の並々ならぬ努力の賜物であると理解し、少しでも皆様に近づくことが出来るよう微力ながら努力して参りたいと思っておりますので、一層にご指導をお願いいたします。

がまの油売り口上の出陣

碓井 賢

平成十八年十一月十五日は、友人の勧めで筑波山ガマの油売り口上研究会が主催した四日間の講座を受講し、終了証書をいただいた日である。その日から、今までの人生にはまったく考えもしなかった、生甲斐のある生活といつか苦難の日々が始まるとは、夢にも思わなかったのである。

次に友人からは、ガマの油の効能が分かったら、『口上と芸能及び趣味の学習研鑽する』つくばね会』に入ると良い、と勧められ入会する。そこには、先輩方の芸に真面目に取り組む姿があり、親切な方ばかりでビックリ仰天。特に宇野先生の指導力には驚く。七十歳を過ぎての勉強であるが、歳を忘れて頑張ってしまうほど、教え上手である。

口上は説明することではなく、相手方に届けること。シンプルがベストであり、慣れることは絶対にあつてはならない。馴染むのは良いと思うが、自分に酔いしれた時、お客さんは感動しない・・・と教え

サアサアと 声張り上げて 秋筑波	(十月)
葉桜や まだ口上は 花吹雪	(四月)
口上に 蛙現わる 水辺かな	(四月)
五月雨や まだ鐘かたる がま口上	(五月)
筑波嶺を 植田に映し がま口上	(五月)
お辞儀から 習う口上 山笑う	(六月)
口上の 強弱つくや 青田風	(七月)
口上に 身振りを付けて 男郎花	(九月)

られる。以前、美空ひばりさんが雑誌の対談で「皆さんが聞きたいのは、崩して歌った歌ではなくて、その歌がなぜヒットしたかというその根本、最初のメロディーが聞きたいのだから、私はきちつと歌っていきたい。」と話していた言葉を思い出した。一行ごとに言葉と実技の指導、時にほめられ、時に叱られて、がまの油売り口上がこんなにも難しい、奥の深い大道芸と認識させられる。筑波山麓に住んだ幸せと、苦しみを味わっている。入会して三カ月ほど過ぎて、土浦市の桜の名所『乙戸沼公園』で生徒二名の個人教授を受けたことがあったが、あれは、教えてもらうことは勿論だが、自分が学ぶ気があれば、近くの公園等で自然を相手に声を出して練習しなさいとのメッセージであったかと思う。早朝、近くの公園で声を出し体を動かすと、身も心もすっきりとする。筑波山名物がまの油売り口上、誠に万歳である。次に、私のがま口上の練習の成果を五七五の俳句で詠んでみました。笑ってください。

余生をどのようにと思ひ悩んだ末、人生のリサイクルと言うのでしようか、腹の底から声を出し再出発、との思いで昨年三月菅原公民館に向いた。清水さんに連れられ、寺田さん、池田さん、私と、広い部屋で四人は寂しかった。「せつかく来たのだから、やってみないか。」と言われて、清水さんに教わった口上を夢中でとなえたという感じでした。寺田さんが「これは又、別の口上だ。」池田さんは黙って行ってしまった。私は、自分なりに自由に文句を入れており、茨城弁で発音しやすい言葉で始めていた。これが、苦勞の始まりとは知らずに覚えてしまっていた。いよいよ、宇野先生の授業が始まる。「そんなのはダメだ。基礎からのやり直し。」台本を見て一から特訓。一度覚えた文句はなかなか取れない。先生の前では、前の口上が出てしまう。碓井さんが先に指導を受け、『なかなか良い』と褒められる。次の私には、必ず何らかの注意がある。今が苦しい時期だと言われる。月日の経つのは速いもので、二月頃から新人は、午前十時から教わることになった。一年くらい過ぎた四月ころ、二人で最後まで演じたところ、『碓井さんが一〇〇点、稲葉さんは五十点、一生懸命やらないと碓井さんについていけない。』という講評。私は碓井さんより三カ月くらい早い入門、このままついていけるか不安になり、...

人生のリサイクル

稲葉 茂

宇野先生の指導は、先生が自ら演技しながらの真剣な指導。頭の下がる思いで、この厚意には、どうしても応えていかなければならないと、心に決める。『読書百遍自ずから』の精進で特訓を重ね、今年七月の授業では私が先に講習を受け、先生より「良く頑張った！」次に碓井さんが受け「二人とも合格！」と、握手を求められ、体の中に血潮の走るのを感じました。先生は今も、熱い情熱をお持ちで、語の一つ一つが、がまにながっております。これほど熱心に指導してくださいました宇野先生には感謝の念に耐えません。来る本番に向け、更なる勉強を重ねていかなければならないと思います。今後とも会員の皆様には、ご教授のほど、宜しくお願いいたします。

【お知らせ】

平成19年
がま口上講座の開催

①10月6日(土) ②10月20日(土)
③11月3日(土) ④11月18日(日)
10:00~12:00 計4回
場所:土浦市立「小町の館」
新会員の募集と会員の練習を兼ねております。受講希望の方は、林会長まで連絡を！(029-862-3629)

歴史探訪会および忘年会
日時:平成19年12月1日(土)
午後1時30分~
12月2日(日)
場所、費用、申し込み等については別途ご案内いたします。

三把稲

田神 まゆい

先人の教えには感服させられることが多いが、八月五日のがま祭り会場では、この思いを新たにすること事態に遭遇し、早速書き連ねることにする。

梅雨明けから一週間、まだ暑さに順応しきれない身体を引きずるように、筑波山ケーブルカー乗り場へと向かう、がま研の一行十一名。始発の八時四十分まで、宮脇駅にて待つ。乗り込むのは、我々と山頂販売店の人たちか？がま祭りの当日というのに、いつもと変わらないノンビリとした空気に少々拍子抜けする。山頂はかげり気味で、気温もまだ低めとあって、シミ、しわの気になる身にはありがたいかぎり。既に自からの脚で登り着いた人たちが数名、ベンチに腰を下ろして着替えなどしている。

はて、我々はどこで演じればいいのかのだろう。今年はお世話をしてくださる方も無く、場所も用具も皆目分らない。〈場所も時間も回数もご自由に〉とのことらしい。観光協会のテントとおぼしきところから、机を一



脚失敬し、ここぞと思ひ定めて駅の真正面に会場を作る。紙芝居の枠には、“百均”で富山さんが調達してくださった『準備中』の幕が下がり、なかなかいい感じ。

腹話術人形がまの研ちゃんと呼び込みに始まり、紙芝居、がま口上という一セットの流れで、初回十一時の予定を少し前倒して、十時に初演、二回目を十一時に行う。時折、薄雲の間から強烈な日差しが照りつけるものの、割にしのぎ易い。

十二時の回は、十九代名人によるがま石への奉納口上に敬意を表して、我々は昼休みを取らせていただく。千円分のガマール紙幣を九百円で買い求め、売店でお昼を注文する。ゆつくり英気を養って、一時の回に臨む。気温も日差しも酷しいが、お客さんが腰を下ろして待つてくださるからには、我々の意気も自然に高揚してくる。拍手のうちはこの回の熱演も終わるが、かなたにゴロゴロと雷の気配。筑波山にはどんなよりと雲もかかっているような・・・。

「昔の人は、筑波山にあんな雲がかかると『三把稲』といって、稲を三把束ね終えないうちに雨に降られたから、すぐに終い支度にかかったんだよ。」少し先人の鈴木さんが教えてくださった。

時代によるのか、地域によるのか、誰でも知っている言葉ではないようだ。寺田さんもご存知のようで、「昔の人はそれで、何度もひどい目にあつたんだらう。ここは、教えに倣って、帰り支度にかかろう。」とのこと。もう一回くらしいやつてもいいかな・・・と思わないでもなかったが、総指揮官の言葉にみんな素直に従っ



た。そうこうするうちに、『雷の状況によつてはケーブルカーが停止する場合もある』との放送まで入る。手早く片付けて、早々に下山。駐車場に着くころには、ぽつりぽつりと雨粒が落ち始めた。

先人の教えと寺田総指揮官の英断に感動しつつ、車に乗り込んで五分も経たないうちにすさまじい雷鳴とバケツをひっくり返したような豪雨。ワイパーも役に立たないほどの雨に立ち往生となる。「よかった。さすが。」とつぶやきながら、しばし雨の勢いの衰えるのを待つ。今夜は久しぶりに涼しい夕べとなるかも・・・と期待しつつ北条の集落を抜けるころには、道路が全く濡れていないのに啞然とする。

八七七mとはいえ、山の気候は変わりやすく、またそのことを暮らしの中で戒めながら生活してきた、先人の知恵に思いを馳せた一日であった。

編集後記

今夏は猛暑続きで、節電を心がけると、仕事が全くはかどらない。少し秋の気配を感じ、かわら版をお届けすることができ、ほっとしております。皆様の夏はいかがでしたでしょうか。

次号の原稿、一月をめどにお寄せください。

編集 子